

飯田までの道中、大平(おおだいら)で半日雨に降り込められただけで、今日も朝から空はくつきりと晴れ渡っていた。先ほどから、天竜川の流れの音がどんどん近づいて、今はミチのすぐ傍を連れ添うように流れている。

二刻は歩いたと思われるのでひと休みするには丁度いい。河原に降りたミチは、流れに手拭を濡らして額の汗を拭いた。ついでに脚絆を解き足袋を脱ぐと、着物の裾を少しからげ、流れに足をつけてみた。ひんやりと気持ちがいい。

ゆつくりとふくらはぎが濡れる辺りまで進むと、流れの圧力が増して押し流されそうになる。川底はゴロ石である。その上に立っているの、足裏を水流がくすぐる。

顔を洗いたいと思った。けど手を離せば着物が濡れてしまいそうである。浅い方へ引き返えす為に向きを変えようとしてしくじった。

足を浮かせた途端、流速に足がさらわれたように流れの中に尻もちをついてしまった。

慌てて立ち上がりかけてやめた。一旦濡れてしまえば、慌ててみても何も変わらない。既にお腹の辺りもひんやり気持ちが悪くなった。

ミチはしばらく流れの中に座ったまま、岩に砕けるしぶきが、キラキラと陽の光をはじくのを眺めていた。

ずつしりと重くなり、足に絡み付く着物の所為で再び転ばないよう気を付けながら岸に向かったミチに

「あら尼さん、どうしたの？」と野良着姿の女が声をかけた。ずぶ濡れで川から上がって来る姿に驚いた様子だった。

顛末を話したミチに笑いながら女は

「わたしやね、畑仕事の帰りなんか、しょっちゅう野良着のまま川に入るよ。家に帰り着くまで涼しくていいんだから。今日もそのつもりで来てみたら先客があつたってわけ。この藪の向こうは道から見えないし、身体も洗って着てる物もじゃぶじゃぶ洗って、それを又着て帰るのさ。洗濯の仲間も省けるしね。だけど尼さんはそういう訳にはいかないね、濡れたままじゃ歩けないだろう。そうだ、どのみち旅籠に泊まるんだろ。どうだろうね、よかつたら汚いとこだけどうちに泊まっていかない？旅の話しなんか聞かせてくれると嬉しいな。どうかね？」

ミチとしては、全く異存はなかった。突然だけどむしろ幸運な申し出だと思った。ぐしよぐしよの裾を絞ってみても、すぐに着ている物が乾くわけではない。

伊那松島まで歩くつもりでいたが、素直に女の申し出に従った。

道に戻って少し歩いた所に、狭まった川の中ほどの岩まで二本の杉の丸太が渡してあった。更にその岩から同じように二本の丸太が次の岩に渡してあり、そこから向こう岸に矢張

り丸太が渡っている。

さわんど(沢渡)というのだ、と八重と名乗る女が教えた。どうやら女の家はその、さわんどを越えた川向こうにあるようだった。

途中で、稲木を組む作業をしている夫婦らしい人影をみつけて八重が叫んだ。

「おおい仁助！今日はうちにやお客人だ。晩飯食ったら客人の話聞きにうちに来ねえか。仙吉達にも言ってくれエ」八重の一声の効果は絶大だった。夕食が終わって暫くすると続々と人が集まり始め、広くもない座敷に十数人がひしめいた。

腹積もりになっていた人数が集まり終えたのだろう、八重が口を開いた。

「みんな集まったようだな。え、この方は菊舎さんといって旅の尼さんだ。さわんどで川にはまってるのを拾って来たってわけ。」と、まるで道べたの石ころでも拾って来たような紹介をした。

「拾ったはないだろ、お招きしたんだろ」と、半畳を入れる者もあったが頓着なかった。

「先ず菊舎さんに尋ねたいのは、何処からおいでになったのかな？」

「長門です。長門と言ってもお分り頂けないでしょうが、安芸の西隣り、豊前の手前です。海がすぐ傍ですので魚が豊

富です。私の家の二町先は砂浜で、干潮の時はエビやカニが獲れます」

そう返事をするの大勢の中から「カンチョウって何ですか？」と声が出た。

「ああそうですね。この辺りには海が無いので、干潮と言っても分りませんね。海の水は月の力に引き寄せられるので、月の位置によつて海岸の水が増えたり減つたりするのです。水が遠くに引つ張られて砂浜が沢山現れた時を干潮というのですよ。その反対が満潮です」

すると矢張り大勢の中の別の女が

「あたしやお伊勢さんに参った時に初めて海を見たけど、ありやでかいもんだね。見渡しても、見渡しても先が見えねエ。その先が何十里も何百里もあるって聞いてそりやあたまげた。そのでかい海を引き寄せるといふのだから、月はえらい力持ちなんだな」

「そうだなあ、なのにわし等が引き寄せられねえのは何でかな？もつとも、ゆうべわしが転んだのは、ありやあ月に引き寄せられた所為かもしれねえ。」

「馬鹿言うんでねえよこの人は。ゆうべはお前さんが酔っぱらつていただけじゃないか」と嬢らしき女が言う

「いやそうじゃねえな。ゆうべは地べたがわしに近づいて来たから、ありや月の所為だ」

「そうかも知れねえな。昨日、干してた洗濯物の中から、

俺の新しい禪だけが無くなったのも変だと思つてたが、あれもきつと月の所為だろ」と同調する者もいた。

黙つて聞いてた八重が呆れ顔で

「付ける薬が無いねこの二人にや」と言つて続けた。

「砂浜にエビが居るつて言つたけど、どんなエビだい？」

「六寸から七寸位の、横に黒い縞模様があるエビで、砂に潜つているのを掘り出します」

「へー驚いた。大きさが六寸も七寸もあるのかい？ここらの川のは、精々一寸か二寸だけど。美味しいのかな？」

「味は格別です。寒い時季にはカニも獲れますよ。矢張り砂に潜つているのを探します」

「砂に潜つてて苦しくねえのかな？」と誰かが言った。

海の話がよほど珍しいのか次々に声を出す者がいて、瞬く間に座が盛り上がった。八重が更に

「他には何か珍しい物つてあるのかな？」と言つてミチを見た。

「そうですね、私の家からは十里位離れていますけど、鯨が獲れます」

「鯨？鯨つて魚のうんとでかい、あれだろ。」

「形は魚に似ていますが、魚ではなくて、私達人間や犬、猫と同じ仲間なのです。その証拠に水面に浮いては呼吸をしていますし、母乳で子供を育てます。魚のようにウロコもエラも有りません。大きさは人間の何倍も何十倍もあつて、鯨

を捕まえる時はまるで戦のようらしいですよ」

「母乳つてことは、おっぱいがあるんだね」

「そうでしょうね。残念ながら私も見たことが無くて……」

と応えたミチに、先ほど禪が無くなったのは月の所為だと言つた男が

「人間と同じつてことは毎晩むつみあうのかね？」と言つた。

途端に、地べたが自分に近づいて来たと言つた男が

「お前えのところじゃ毎晩むつみあつて居るのか？道理で六つも次々とガキが生まれたわけだ」

と言つたので満座が大きな笑い声に包まれた。

「本当に付ける薬が無いよ、この二人にや」

八重は諦め顔でそう言つたが、話はまだまだ盛り上がりそうな気配の、さわんどの夜だった。